

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24330223

研究課題名(和文) 海外にルーツがある文化的に多様な子ども達の表現活動を中心とした学習共同体の研究

研究課題名(英文) The research of learning communities centered on expression activities for linguistically culturally diverse children who have some roots in overseas

研究代表者

石黒 広昭 (Hiroaki, ISHIGURO)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：00232281

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、多様な文化的背景を持つ海外にルーツのある子どもの「自己表現活動」を中心とした学習実践を調査し、学習を動機付ける自己表現活動の理論化を目指した。調査は国内と国外で実施され、表現活動を支援する団体の参与観察、子どもを含む関係者インタビュー、芸術的介入活動が行われ、実践上の課題と活動の理論的把握がなされた。実践者との会議(POD会議)も定期的実施され、実践者との協働のあり方も模索された。

研究成果の概要(英文)：The project addressed issues on the learning community for linguistically culturally diverse children who have some roots in overseas. The research focused on expression activities which motivate children's learning. The researches on the learning communities were conducted mainly in Japan besides United States of America and Canada. It shows theoretical perspective on the management of the supporting activities and their tasks. The issue of collaborative research was addressed too.

研究分野：教育心理学

キーワード：言語的文化的多様性 マルチリテラシー 自己表現活動 発達 学習共同体 パフォーマンス

1. 研究開始当初の背景

(1) 多言語接触環境にある海外にルーツを持つ子ども達のアイデンティティの危機の克服：移民の子ども達の学習権が十分保障されていないとの指摘は多い(宮島・太田,2005)が、複数の言語、文化に接触して生きる人々のアイデンティティの危機については十分な問題提起がなされていない。批判理論では、学習とは、知識獲得、社会関係の構築、アイデンティティの交渉の多層的な営みであると考えられてきた(Apple,1996)。とりわけ外国にルーツをもつ子どもたちにとっては他者との十分な人間関係を作れないことや自らのアイデンティティの不安定さが結果的に教科学習を疎外する結果をもたらしていること(学習の危機)が指摘されてきている(Cummins,2000)。従って、そうした子ども達の学習課題を単に学習言語が十分獲得されていないことや第二言語の習得ができていないこと、また、さらには異なる文化的習慣や技能を十分習得していないという個人能力の不全によるものと矮小化して捉えることは適切ではない(石黒,1998)。本研究では、これらの子ども達が抱える心理的不安定感を表現活動を通して克服することで、学習と発達の危機を乗り越える可能性を社会文化的アプローチ(石黒,2006)から理論化することを目指す。自分を他者と結び、自分に自信をもたらす、結果的に学力向上を後押しするようなリテラシー活動についての研究は移民の多い北米の教育研究者によってなされている(Cummins & Early,2011)。Gutierrez (2008) は季節労働者としてアメリカに移住した家族の子ども達が自叙伝 (autobiography) を書くことを通して次第に他者との関係、そして自己認識を変えていく過程を分析している。表現することで他者との関係を組み替えることは自己の世界に対する見方 (ideology) も変える (Ball & Freeman,2004)。それによって「自分はここにいてもよいのだ」という居場所感と自分の未来に対する期待が生まれる。

(2) リテラシー学習を通じたコミュニティの発達と個人の発達の共変化：従来の文化的多様性を背景に持つ子ども達のアイデンティティの危機論は、「異文化への適応論」(箕浦,1991)に代表されるように、学習者が既存のどのコミュニティに属するのかを問うものであった。この立場では、既存コミュニティは安定した知識や技能、慣習の体系を持つものとして捉えられ、新参加者はそれらを所有していない存在として位置づけられる。だが、現実にはどの人もハイブリッドな文化を持ち(石黒,2000)、「純粋な安定した文化」をある社会から抽出することなど現実には不可能である(石黒,2010)。コミュニティは社会実践にともなって動的に構築される(Lave & Wenger,2001)。また、同じ地域コミュニティに参加していたとしても、参加者の実践との関わり方によってその活動に対す

る動機の違い(Engestrom,1987)や、それぞれの人が「心理的に帰属するコミュニティ (community behind, Matusov,2008)」は異なる。アイデンティティ形成とは、所作を含む広い意味での「自らのことば」を他者に対して作り上げていく過程である。実践のコミュニティではその実践の中で固有の意味を持つことばが創られていくが、それは実践のコミュニティの変容とともに変わっていくものである。本研究は活動理論(Engestrom,1987)、状況論(Lave & Wenger,2001)に基づき、コミュニティの発達と個人の発達の関係、その両者を媒介する道具としてのリテラシーの役割など、人間の発達原理に対する根本的な問いに答えようとする。これまで北米を中心に行われてきた自叙伝などを使った自己表現活動研究はリテラシー活動による個人の内的変化を問うものであったが、本研究では個人の学習とその人が参加する学習コミュニティの共発達過程を描くことで新たな理論的展開を図る。

2. 研究の目的

(1) 多様な文化的背景を持つ海外にルーツのある子ども達の「自己表現活動」を中心とした協働学習実践を調査し、これらの子ども達の学習を動機付ける学習活動の理論化を目指す。本研究でいう海外にルーツを持つ多様な文化的背景を持つ学習者とは、国籍に拘わらず、文化的境界を越えて生きる人々、即ち、広い意味での「移民」を指し、一世ではない人達も含む。調査はそうした子ども達の学習と発達の支援を行うボランティア組織で実施者の協力を得て行われる。日本では、これらの子ども達に対する学習支援は依然学校が中心であり、方針もまだ十分定まっていない。本研究では、そうした実践を既に継続的に行っているアメリカ・サンディエゴ、カナダ・トロントの先進事例に学びながら、地域の独自性に根ざした学習支援理論の構築を目指す。北米を中心に行われている自己表現活動研究は個人の内的変化を問うが、本研究では個人の学習と学習コミュニティの共発達過程を描くことで新たな理論的展開を図る。

(2) 調査は、多様な背景を持つ学習者が集う活動組織が展開する自己表現活動に対して行われる。近年アート・パフォーマンスを支援活動に取り組む組織やプロジェクトワークが日本でも見られるようになってきているが、その理論的把握はまだなされておらず、実践者に任せられている状況である。日本各地のそうした活動に関心を持つ団体と協働しながら、参与観察、個別インタビュー、科研プロジェクトが主催する介入ワークショップなどを行い、そうした実践で展開されている自己表現活動の内実を把握するとともに、子どもたちの成長に有意義な活動の展開を行う上で理論的示唆を得ることが目指される。ワークショップを通して生まれた作品

の質や作品作りの過程を調査していくのはもちろん、自己表現活動が人々の間を媒介する道具として機能する状況を明らかにするため、作品発表を通じた地域や未知の他者との新たなネットワーク形成過程も捉える。

3. 研究の方法

(1) 海外にルーツがある文化的多様性を持つ子ども達の学習支援実践団体、演劇活動支援団体と連携し、その実践団体が実施している活動に対して、チーム事に参与観察を行う。

子ども達がこの活動に参加する中で、どのような表現活動を行っていくのか、そのことが子ども達の学力、仲間関係、地域との関係、学校の中での位置づけなど、個人にどのような変化をもたらすのか、その子ども達が参加する学習コミュニティがどのように変化するのか、記録、分析する。さらに、カナダ、アメリカの先進実践組織、研究者と連携することで、日本の大都市圏固有の特徴を比較分析する。

(2) 先進地域の実践調査と海外研究協力者との協働方法：研究協力者のマサチューセッツ大学アマースト校のテレサ・オースチン教授には、バイリンガル教育研究の立場から助言をもらおうと共に、当科研プロジェクトが主催して実施した演劇プロジェクトに、2012年度と2015年に参加し、介入過程について議論を深めた。また、現地の日本語補習校との接触にあたって関係者の紹介を受けた。カリフォルニア大学サンディエゴ校のオルガ・バスケス准教授は現地で多言語多文化の子どもたちに対する学習支援教室を主催する実践研究者であり、その実践活動の観察援助を受け、さらに理論的な議論を深めた。日本では2014年度に名古屋で実践者向けのワークショップを行い、関連事項について日米の課題を比較検討することができた。竹内身和氏は日本とカナダで関連する子どもたちの学習過程の研究を行っており、理論的な検討を行う上で多くの示唆を受けた。

(3) 当初計画からの変更：日米加においてそれぞれ主として調査対象となる活動団体を決めており、米加では予定通り進められたが、日本では当初予定していた新宿の支援団体が2013年度から都合により調査できなくなった。しかし、他地域の団体と連携がなされ、研究活動には支障がなかった。

4. 研究成果

(1) 2012年度は、国内では新宿の放課後学習支援活動団体と協働し、子ども達の言語使用状況調査、放課後学習支援活動の観察、自己表現のためのワークショップを行い、海外では、アメリカ合衆国・アマーストとサンディエゴの日本語継承語学校、ニューヨークのコースのパフォーマンス活動支援団体(All Star Project)、サンディエゴの学習児童支援活動(La Classe Magica)、カナダ・トロントの日本語継承語学校を訪問し、観察調査と

実践者面接、さらに支援研究者との研究交流を行った。実践者の持つ学習観、発達観が子ども達に対する支援のあり方にとっても大きな影響を与えていることがわかった。インフォーマルな学習支援活動は学校と違い、教科書やカリキュラムなどの共通事項がなく、実践者の選択に任されるため、実践者個々の教育哲学や支援力量が学校以上に子ども達に直接影響する。また、実践者は日本の学校の教授学習モデルをインフォーマルな学習支援の場にそのまま持ち込みがちで、このことが日本の学校に必ずしも適応的ではない子ども達にとって難しい状況を作り出しやすいことも明らかになった。インフォーマルな場において、子ども達に適切な学習支援を行うためには、学校をモデルとしない新しい活動モデルが必要である。その試行として初年度は前述のオースチン教授によってポアールの演劇理論を取り入れたコース・ワークショップが行われた。

(2) 2013年度には、子どもたちの支援に中心的な役割を果たしている、実践者と研究者の相互交流の場として、多くの異なるタイプの実践団体を大学に招聘し、「POD 会議」(実践支援団体の実践者カンファレンス)を開催した。日本における関連する子ども達とその支援活動の現状と課題の確認を行った。さらに岐阜県可児市で実施された市民参加型演劇活動(多文化プロジェクト)に参加し、子ども達の自己表現活動について調査した。国外調査では前年度に続き、米加の団体において調査を行った。子どもたちや実践者へのインタビューを増やすなどして、日本における状況との差異を検討した。継承語学習において子ども自身にとっての意義と親にとっての意義の乖離も明らかになった。

(3) 2014年度は、第2回支援実践者会議(2nd POD)を群馬県伊勢崎市教育委員会の後援を受けて、同市で海外にルーツを持つ子どもたちの学習支援を行っているNPO団体と共同で現地で開催した。今回は当事者である子どもたちが多く参加し、理論に基づいた実践プログラムを試行する機会ともなった。また、前年度と同じく、岐阜県可児市で継続的に実施されている多文化演劇プロジェクトのフィールド調査を行い、演劇の発達促進機能について年度比較を実施した。日本、カナダ、アメリカ合衆国のすべてにおいて、介入型ワークショップとして「ミュージアムワークショップ」を実施し、その共通特徴と差異を検討した。このワークショップは仮想地域博物館に自分が展示したい作品を製作することが課題とされ、地域コミュニティの中にそれぞれ個人が自分をどのように位置づけているのかを確認するアイデンティティ・ワークショップである。また、演劇を発達支援活動として導入するニューヨークのAll Star Projectに加え、教師に対するアウトリーチ活動に力を入れているニューヨーク市立大学応用演劇学科の実践者と交流し、自己表現活動とし

でのパフォーマンスについて資料収集を行った。加えて、実践者に寄り添ったフィールドリサーチを進めるため、「協働的エスノグラフィ」や「ヴィジュアルエスノグラフィ」の手法について検討した。さらに、研究成果を広く実践者、当事者にも告知されるため、科研専用ホームページに日英語で掲載するように努め、一部ポルトガル語、スペイン語でも掲示がなされた。

(4) 2015年度は最終年度に当たるため、これまでの調査を継続すると同時に、研究成果の総括を行った。まず、国内調査としては、本プロジェクトが協働研究を進めている岐阜県可児創造文化センターで実施されている多文化演劇プロジェクトの参与観察を行った。また、ブラジルにルーツを持つ子どもたちの支援を行っている関西の団体との協働活動としてシナリオ創作演劇実践を幼児、小学生を対象に行った。北米でも、これまで継続して協働研究を進めてきている、合衆国マサチューセッツ州にある日本語補習校において、支援者に対してシナリオ創作演劇ワークショップを行った。カナダ、トロントでは継承語学校において、継承語学習組織の維持管理の課題を確認した。併せて、合衆国、カナダともに言語的文化的に多様性を持つ子ども、保護者、支援者に面接調査を継続実施した。こうした成果の一部は既に本プロジェクトのホームページに紹介されている。四年間の研究を通して、子どもたちの成長を支援する自己表現活動としてアート・パフォーマンス、特に演劇活動が焦点化されてきた。そのため、本科研の総括として、12月はこれまで本研究プロジェクトがかかわってきた支援実践団体関係者と、地域で多様な文化的背景を持つ人たちに演劇活動を実践している実践者に集ってもらい、第3回支援実践者会議(3rdPOD)を開催した。言語的文化的に多様な子どもたちの発達支援ツールとしてのアート・パフォーマンスの持つ力について議論を深めることができた。

<引用文献>

Cummins, J. & Margaret, E. (2011) *Identity texts: the Collaborative Creation of Power in Multilingual Schools*. Trentham Books Ltd.

Gutiérrez K. D. (2008) *Developing a Sociocritical Literacy in the Third Space*. *Reading Research Quarterly*, Vol. 43, No. 2 (Apr. - Jun., 2008), pp. 148-164.

石黒広昭(1998) 「心理学を实践から遠ざけるもの」 佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭 『心理学と教育実践の間で』東京大学出版会, 103 - 156 .

石黒広昭(編)(2006) 『社会文化的アプローチの実際』北大路書房

宮島喬 (2005) 「学校教育システムにおける受容と排除 教育委員会・学校の対応を

通して」 宮島喬・太田晴雄(編著) 外国人の子どもと日本の教育 東京大学出版会

Vásquez, O. A., (2002) "La Clase Mágica: Imagining Optimal Possibilities in a Bilingual Community of Learners" New Jersey, Laurence Erlbaum Publishers.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

石黒広昭(2015) 「言語的・文化的に多様な背景をもつ子どもが「演じる」ことの意味：海外にルーツをもつ子どもたちの発達再媒介活動としての演劇」 『立教大学文学部教育学科年報』 58, 63-82. (査読無)

石黒広昭(2015) 「「質的心理学ハンドブック」書評：「誰が「質的」心理学を必要とするのか」 『質的心理学研究』 14, 185-186. (査読無)

宮崎隆志(2015) 「Community Development as Community Empowerment.」 『社会教育研究』 33, 1-14. (査読無)

松井かおり(2015) 「身体で学ぶ漢字 - 外国人の子ども達と外国人住民に対する漢字ワークショップから - 」 『朝日大学一般教育紀要』, 40, 51 - 64. (査読無)

石黒広昭 (2014) 「教室における「第二言語教育」の課題と挑戦：国際移動する子どもたちの発達支援にむけて」 『立教大学教育学科年報』, 57, 49-71. (査読無)

宮崎隆志(2014) 「重なり合うコミュニティ」 『協同組合研究』 33, 23-29. (査読無)

宮崎隆志(2014) 「現代学習論と宮原社会教育論」 『社会教育研究』 32, 1-6. (査読無)

宮崎隆志(2014) 「生活変容の現代性と自己形成論の課題」 『生活指導研究』 31, 29-40. (査読無)

Takashi, M. (2014) 「Community Development for Community Empowerment」 『社会教育研究』 30, 1-10. (査読無)

宮崎隆志(2013) 「意味空間としての場の発展論理」 『社会教育研究』 31, 1-9. (査読無)

宮崎隆志(2013) 「コミュニティ・エンパワメントの論理」 『臨床教育研究』 1, 68-88. (査読有)

館岡洋子(2013) 「教育現場の変革のための実践研究を支える質的研究」 『質的心理学フォーラム』 5, 69-70. (査読有)

館岡洋子(2012) 「テキストを媒介とした学習コミュニティの生成 二重の対話の場としての教室」 『早稲田日本語教育実践研究』 1, 57-70. (査読無)

〔学会発表〕(計 17 件)

Ishiguro, H. (2016) Collective Reflection of Classroom Learning Through Improvisational Drama Play for Linguistically /Culturally Diverse Children, in ECER, University College Dublin, Dublin, Ireland, 22-26, August, 2016.

佐々木陽子・土屋由美・浜田寿美男・宮崎隆志・石黒広昭 (2015) 「ハイブリッド社会における PLAY(演劇パフォーマンス)による他者理解の可能性」『日本心理学第 79 回大会』名古屋国際会議場(愛知県・名古屋市)(9/22-24)

石黒広昭(2015)「言語的文化的に多様な子どもたちの「私の場所」の表象：アイデンティティ・ワークとしての「博物館ワークショップ」」『日本心理学第 79 回大会』名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)(9/22)

館岡洋子(2015)「教授法から学習環境のデザインへ - ピア・ラーニングの提案」インドネシア, バンドン(2/25) (招待講演)

館岡洋子(2015)「パネルセッション：実践の共有によって教師は何を学んだか」『協働実践研究会』早稲田大学(東京都)(2/21)

石黒広昭・石川純子(2014)「即興演劇の自己表現活動としての可能性 - 応用演劇(Applied Theater)実践からの考察 - 」『日本教育心理学会大 56 回大会』神戸国際会議場(11/8)(兵庫・神戸市)

石黒広昭・館岡洋子・森さゆ里・石川純子・宮崎清孝・土屋由美(2014)「言語/文化的に多様な子ども達が「演じる」ことの意味 - 海外にルーツを持つ子どもたちの発達再媒介活動としての演劇」『日本教育心理学会大 56 回大会』神戸国際会議場(兵庫・神戸市)(11/9)

Miyazaki, T., McClenaghan, P., Takeda, R. & Ohtaka, K. (2014) Dispersibility and Homology in Community Empowerment. The 4th Congress of the International Society for Cultural and Activity Research, Abstracts. (Oral Session), Australia, Sydney, September 29-October 2.

館岡洋子・池田玲子(2014)「グローバル時代における日本語教育の協働学習の実践と理論」『北京日本学術研究センター公開セミナー』(中華人民共和国・北京(4/28)(招待講演))

館岡洋子(2014)「協働の学びの場をデザインする」『国際交流基金バンコク日本文化センター主催 さくら地方研修会』タイ, チェンマイ(2/15-16)(招待講演)

館岡洋子(2013)「他者理解自己理解につながるピア・ラーニング - 自分の問題として考

える」『日本語教育学会平成 25 年度第 9 回研究集会(四国・中国地方)』愛媛大学(愛媛県・松山市)(11/30)

館岡洋子(2013)「協働の学びの場をデザインする」『国際交流基金バンコク日本文化センター 2013 年度第 1 回日本語教育セミナー』タイ, バンコク(11/16)(招待講演)

三嶋博之・ヴァルシナーヤーン・森直久・石黒広昭・サトウタツヤ・河野哲也(2013)「生態心理学と文化心理学の邂逅：社会文化的現象への応用」『日本心理学会第 77 回大会』札幌コンベンションセンター(北海道・札幌市)(9/19)

Tateoka, Y. (2013) Designing Processes for Collaborative Learning: Collaborative Reading in the Classroom. Tokai University European Center (TUEC) Japanese Language Education Workshop. Denmark, Vedbæk, April 27-28. (招待講演)

Ishiguro, H., Takeoka, Y., Miyazaki, T., Matui, K. & Fujino, Y. (2013) Design of Learning Community for culturally/linguistically diverse children. at LCHC, UCSD, San Diego, USA, Feb 21.

館岡洋子(2012)「タイで育つ子どもたちを、新たな豊かさへ繋げる複言語・複文化の視点」『タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会』タイ, バンコク(8/15)

〔図書〕(計 10 件)

石黒広昭(2016)「子どもたちは教室で何を学ぶのか」東京大学出版会 256.

宮崎隆志(2015)「地域教育運動における地域学習論の構築過程」佐藤一子(編)『地域学習の創造』東京大学出版会, 27-49.

宮崎隆志(2015)「Social Pedagogy とコミュニティ教育」松田武雄(編)『社会教育福祉の諸相と課題』大学教育出版, 133-149.

石黒広昭(2013)「実践される文化 - 子どもの日常学習過程における大人との協働」河野哲也(編)『知の生態学的転回 3 倫理人類のアフォーダンス』東京大学出版会. 107 - 158.

館岡洋子(2013)「日本語教育におけるピア・ラーニング」中谷素之・伊藤崇達(編)『ピア・ラーニング 学び合いの心理学』金子書房, 187-203.

大塚三輪・清川幸子他(館岡洋子 13 名中 9 番目)(2013)『ピアラーニング - 学び合いの心理学』金子書房, 187-203.

韓美卿・館岡洋子(2013)『教授法から学習環境デザインへ - ピア・ラーニングの実践から考える』J&C, 69-103.

石黒広昭(2012)「文化：多様な実践を生きる」茂呂雄二他(編)『状況と活動の心理学』

新曜社,11-18.

石黒広昭(2012)「発達に対する社会歴史的アプローチ」中島義明(編)『現代心理学「事例」事典』朝倉書店,244 - 267.

宮崎隆志(2012)「批判的ソーシャル・キャピタル論の提起」松田武雄(編)『社会教育・生涯学習の再編とソーシャル・キャピタル』大学教育出版,24-47.

〔その他〕

<https://sites.google.com/site/podiversity/home>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

石黒 広昭 (ISHIGURO, Hiroaki)
立教大学・文学部・教授
研究者番号：00232281

(2)研究分担者

松井 かおり (MATSUI, Kaori)
朝日大学・経営学部・准教授
研究者番号：70421237

藤野 友紀 (FUJINO, Yuki)
札幌学院大学・人文学部・准教授
研究者番号：60322781

舘岡 洋子 (TATEOKA, Yoko)
早稲田大学・日本語教育研究科・教授
研究者番号：10338759

宮崎 隆志 (MIYAZAKI, Takashi)
北海道大学・教育学研究科(研究院)・教授
研究者番号：10190761

内田 祥子 (UCHIDA, Sachiko)
高崎健康福祉大学・人間発達学部・講師
研究者番号：60461696

(3)研究協力者

Theresa, Y. AUSTIN
Professor, University of Massachusetts,
Amherst (USA)

Olga, VASQUEZ
Associate Professor, University of
California, San Diego (USA)

竹内 身和 (TAKEUCHI, Miwa)
Lecturer, University of Calgary (Canada)